

第一回芥川賞と太宰治の作家像形成

——公開手紙「川端康成へ」における自己宣伝の機能

* 小田桐ジエイク

Analyzing the Creation of DAZAI Osamu's Authorial Image by Examining the
Self-Promotion Functions in a Public Letter to KAWABATA Yasunari

Jake ODAGIRI *

抄録

日本の代表文学賞である芥川賞は現在なお行われ、注目されているものである。賞それ自体の歴史を改めて考えてみると、第一回は非常に重要なものであった。結果的に石川達三『蒼氓』が受賞作品となったが、その過程において太宰治という、当時の新進作家も候補作家となっていた。現在では、石川より太宰がずっと読まれているが、その反転が第一回芥川賞と太宰の自己宣伝と深く関わっているのではないだろうか。本稿では第一回芥川賞と太宰治の作家像形成を中心に検討していく。まずは、当時の雑誌『文藝通信』の役割を考えた上で、太宰治がその場において己の作家像をどのように形成していたのかを論考する。そして、このような自己宣伝という活動によって、その後、太宰の作家像がどのように受容されていたのかを明らかにする。

キーワード：太宰治、第一回芥川賞、自己宣伝、パラテキスト、文芸雑誌、川端康成

1、はじめに——第一回芥川賞と太宰治

芥川賞の第一回が催されることが一九三五年一月に発表されて以降、候補作家や作品に注目が集まり、次第に芥川賞それ自体が日本文学の中で最も重要な役割を果たす文芸賞の一つとなっていた。特に無名新人作家を文学世界にデビューさせるための文芸賞として知られるようになり、現在もなお同じ役割を果たしていると言っている。また、芥川賞には多くの事件や騒ぎが伴ってきた¹⁾。その中で創設以降、最も知られている話は第一回の結果

* 筑波学院大学経営情報学部、Tsukuba Gakuin University

発表後に起きた太宰治と川端康成の応酬であろう。太宰治は芥川賞に落選した反論として選考員の一人である川端康成宛に「川端康成へ」という文章を『文藝通信』に出し、その返事として川端は「太宰治氏へ 芥川賞に就て」を出した。後にこれが「芥川賞事件」として知られるようになる。後ほど詳細を取り上げるが、太宰治が川端康成に「刺す」と書いたことや、川端から太宰への返答の中に「妄想や邪推」などの内容が書かれていたことがこれまで重視されてきた。

このように第一回芥川賞と太宰治の作家像がどのようにつながっているのかを本稿で検討していく。特に『文藝通信』という雑誌を中心に、太宰治の作家像を形成している言説を取り上げ、論考する。これまでの研究・評論史では数多くの雑誌や新聞からの言説を資料として取り上げ、それらの場における太宰に関する言説を抽出し、作家像が論考されてきた。本稿で論じる方法は、多くの資料を一気に取り上げるのではなく、従来の研究や評論とは異なった立場で、一つの媒体として『文藝通信』を取り上げる。したがって、ケーススタディーという形で、一つの場に出でくる言説を集中的にみることによって、時間の経過とともに作家像がどのように形成されるのかを改めてみていく。

本稿で論考していく内容として、まず『文藝通信』という雑誌の性格を確認していく。特にこの雑誌が、太宰治という当時の無名作家の一人にとってどういう意味があり、どのような役割を果たしていたのかを考察する。これを踏まえた上で、太宰が出した「川端康成へ」のジャンルと機能を再考し、公開手紙としての「川端康成へ」が一つの自己宣伝として機能しているのであれば、発表後にどのような反応があったのかを確認していく。掲載後すぐの反応を見た上で、一年が経過した後の第一回芥川賞と太宰（像）

の形成を分析し、当時の太宰に関する意識を明らかにする。

2、雑誌『文藝通信』の性格全体と投書の場合

『文藝通信』という文芸雑誌は一九三三年十月に創刊号が出され、一九三七年三月まで続いた、合計四十二冊の小冊子形の雑誌であった。文藝春秋社から発行された雑誌であるが、総合雑誌『文藝春秋』とは大きく異なる性格の雑誌であった。当時の文学運動の一つとしての「文藝復興期」を背景として、『文藝通信』が創設され、文壇の動きなどに関しては雑誌自体が非常に重要な情報を提供することになった。本節では『文藝通信』の全体的な性格を整理し、雑誌の目的を明らかにしていく。

日本近代文学館刊行の複製版に伴い、八木書店が宣伝文を出しており、『文藝通信』の性格を次のように説明している。

いわゆる文芸復興期に、軽評論、エッセイ、小品、文壇消息、人物論、漫画、アンケート等を毎号64頁の小冊子に満載した異色の雑誌。永井龍男が編集。芥川賞受賞をめぐっての川端康成・太宰治の応酬や、重要な発言やアンケートなどが多い反面ゴシップ記事も多く、他に類のない小雑誌として、興味つきない特色を発揮³⁾。

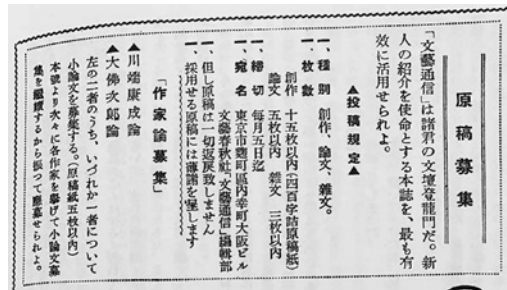
この説明は確かに『文藝通信』の主な性格を捕えていると言えるが、もう一つの重要なことは、『文藝通信』が「新人」「新進作家」のための雑誌ということである。文壇デビューを志している新人作家がこの雑誌を読み、文壇の動きや文学世界の状況を把握するためのものであった。特に、一九三五年一月以降、芥川・直木賞

の創設が発表され、新人作家をデビューさせる目的で同人雑誌が急増していくことを考慮すると、『文藝春秋』のような総合雑誌よりも、新人向けの情報が中心となる、よりアクセスしやすい『文藝通信』は非常に重要な媒体であった。

例えば創刊号から一九三四年二月号まで、64頁目に出されていた「投稿募集」欄にある言説で新人向けであることが確認できる。二つのバリエーションがあるので、両方をここで取り上げ、その中身を確認しておきたい。



1933年10月創刊号



1933年12月号

ここで注目したいのは創刊号の場合には、特に新人向けの言説がないことである。とはいえ、「諸君の文藝修煉場」として活躍できると書いてあり、編集部は新人に向けての意識があることがうかがえる。また、十一月号の場合、明らかに新人が意識されてい

る。「文藝通信」は諸君の文壇登龍門だ」とあり、また「新人の紹介を使命とする本誌」という言説からも読み取れる。すなわち、先ほど取り上げた八木書店の紹介文には書かれていない、新人に文壇や文学世界の情報を提供することが『文藝通信』の主な役割の一つである。『文藝通信』の中に掲載されている多くの記事は、次第に既成作家から新人に向けての内容になり、いわば先輩が後輩にアドバイスをするという場にもなった。更に、こうした「文壇登龍門」という言説は一九三四年二月号まで載せられ、文壇デビューのための貴重な媒体という新人への意識とアピールが読み取れる。

もう一つの注目したいのは、創刊号の「原稿募集」欄の左側の「公開状」募集」というところである。先ほどの八木書店の説明文にあるように、「文藝通信」に太宰治と川端康成の第一回芥川賞に関する応酬があるということは、この「公開状」と深く関係しているのである。すなわち、『文藝通信』は作家同士が誌面に公開手紙を載せる場だけではなく、実際に募集もしていたことがうかがえる。最初に誌面に「公開状」が載ったのは、一九三三年十二月号である。「文壇への公開状」という小特集が設けられ、赤野末吉「文壇小商人は没落する」と田中唯良「一隅で語る」という二つである。その後は全く同じ小特集は設けられていないが、その代わりに公開手紙というようなものが散見できる。例えば、一九三四年十月号に特集として「文壇人私信集」が設けられ、合計十三通が収録されている。このように、多くの「公開状」に関わる特集や小特集が『文藝通信』に出てくるのだが、先述したように、これらの内容は新人作家が既成作家の状況を把握するためのもので、文壇の動きを知るといった目的であった。

一九三五年一月以降、『文藝通信』は以前より「新人」を意識

していたことがうかがえる。第一回芥川・直木賞が催されるといふことが『文藝通信』及び『文藝春秋』の一月号に発表されたからである。賞それ自体は「新人」の文壇デビューを促すためのものであるから、新人向けの傾向が『文藝通信』の誌面で強くなった。例えば、一九三五年二月号にP・C・L「芥川賞を狙ふ人々」という記事があり、冒頭部は「まだ一度もチャーターリズムへ登場せず、しかしその実力はあり、評判もある新人群を簡単に紹介してみる」という文章から始まる。多くの新人作家の名前が取り上げられ、合計六七人が挙げられているが、最初の十四人は詳細に語られ、残りの作家たちは「その他」の中で所属同人雑誌と名前だけがあげられている。ちなみに、この「芥川賞を狙ふ人々」の中には太宰治の名前も見えるが、「その他」で檀一雄と岩田九一という『青い花』の同人と共に挙げられている。

他に、一九三五年三月号に吉川英治のエッセイ「新人への希望」や、小特集「新人作家の印象・作品」の中に平田小六「島木健作に就て」、武田麟太郎「大谷藤子むだばなし」、尾崎一雄「丹羽文雄のこと」、また四月号の室生犀星「系統立てた読書」には新人作家向けのアドバイスが多い。五月号の上司小剣「文壇萎縮時代」ではプロレタリア文学が主に語られるものの、新進作家への言及も多くあり、匿名批評「出発点を出た人々」の中で新人・新進作家が合計二十人取り上げられ、雑誌の傾向が見えてくる。確かに、全ての新人向けの記事で「芥川賞」が直接言及されるわけではないが、文壇の中で認められるにはどうしたらいいのかというような内容が多く書かれていることが重要な点である。

『文藝通信』は最後までこのような「新人」への意識という強い傾向を持ち続け、「文壇登龍門」の精神を維持していたと言えよう。第一回芥川賞の後も、文芸賞が問い直され、新人の今後が

どのように変わるのかがしばしば議論される。『文藝春秋』という総合雑誌と比較すると、『文藝通信』の寿命は比較的短いものだったが、一九三五年前後という「文藝復興期」においては、新人の文壇デビューに意識を置いていた雑誌として非常に重要な媒体であった。また、太宰治が第一回芥川賞に落選した際には、「川端康成へ」というものを出すための場が既に存在していたのである。

3、「川端康成へ」のジャンルと機能を再考

『文藝通信』の性格を踏まえた上で、これからは太宰治の「川端康成へ」を考え直していきたい。まずは、従来の研究と評論がどのように「川端康成へ」を扱ってきたのかを重視したい。なぜかという点、雑誌の性格が「川端康成へ」と深く関係するにもかかわらず、従来の研究と評論では雑誌は意識されず作家自身と併読することが多いからである。こうした研究と評論におけるジャンルの問題を考察した上で、「川端康成へ」を公開手紙として考え直し、中身の機能を「自己宣伝」と併せて捉え直していく。

本格的に「川端康成へ」が読まれるようになったのは主に太宰の没後で、『小説 太宰治』の中で檀一雄は「川端康成氏宛の『文芸通信』の以上な抗議は、太宰がひそかに川端氏へ、一番期待を投げつけた抗議の一文は、当時の太宰の心的状況からすれば解らぬわけでもないが、しかし、あくまでもこれは太宰の誤解に基づく行為であった」と述べている。また、井原あやは「太宰が芥川賞銓衡委員の一人であった川端康成に抗議文」を出したとし、鶴飼哲夫は川端の選評を踏まえ、「太宰は、自尊心を傷つけられ、即

座に抗議文を雑誌に公表した」と述べている。このように、「抗議文」という枠組みが与えられている。更に、鶴飼哲夫は太宰の落選を説明し、「川端康成へ」という太宰の反論文⁸が書かれたと述べる。小谷野敦も「川端康成へ」を「反論文」という類として取り上げている。他に、植田康夫が川端の選評と太宰の反応を取り上げ、「川端に反駁した」としている。これらの評論の中で「川端康成へ」は「反論文」や「反駁文」として扱われていることが読み取れる。

また、他の先行研究を確認すると、松本和也は「川端康成へ」を八つのパーツに分けた上で、その中に作家「太宰治私生活情報」が多く書かれているという。安藤宏は「川端康成へ」を直接ジャンル化していないが、その内容を「反撃」と指摘した上で、この時期の太宰は「実生活のパフォーマンス」をしていると展開していくので、「川端康成へ」をその枠組みに入れて考えていると言っても過言ではない。他にも「川端康成へ」は、例えば「短文」や「小文」などの形でジャンル化されているのが散見されるが、ここで注目したいのは先ほど取り上げた「抗議文」として最も意識されてきた形である。換言すれば、従来の研究と評論において「川端康成へ」は生身の作家である太宰治と併せて読まれることが多いというわけである。

しかし、ここでは改めて「川端康成へ」のジャンルを「公開手紙」として捉え直し、その中にある機能を明らかにしてゆく。まず、「公開手紙」とはどのような意味なのだろうか。個人宛の手紙と異なり、公開手紙は多くの人がその内容を読むという前提で書くことになる。もちろん「創作」とは言わないが、個人宛の手紙と同じ精神で書かれてはいないので、内容は必ずしも真実であるとは言いきれない。公開手紙というジャンルに置き換えると、『文藝通

信』の読者を意識しながら書くものとなる。ただ、既述したように、中身は全てが真実ではない。公開手紙の特徴の一つは、虚実混在という書き方で、読者がその中身の虚と実を分けて読むことは困難である。特に新人であった太宰治にとって、自身の存在を文壇の作家たちに知らせるためのよい機会だったのだろう。

実際に「川端康成へ」の中にある虚実混在を確認すると、『道化の華』の生成情報がその一つである。作品の出来上がりについて多く書かれていて、その内容が次である。

「道化の華」は、三年前、私、二十四歳の夏に書いたものである。「海」といふ題であつた。友人の今官一、伊馬鶴平に読んでもらったがそれは、現在のものにくらべて、たいへん素朴な形式で、作中の「僕」といふ男の独白などは全くなかつたのである。物語だけがきちんとまとめあげたものであつた。そのとしの秋、ジツドのドストエフスキイ論を御近所の赤松月船氏より借りて読んで考へさせられ、私の原始的な端正でさへあつた「海」といふ作品をすたすたに切りきざんで、「僕」といふ男の顔を作中の随所に出没させ、日本にまだない小説だと友人間に威張つてまはつた。友人の中村地平、久保隆一郎、それから御近所の井伏さんにも読んでもらつて、評判がよい。元氣を得て、さらに手を入れ、消し去り書き加へ、五回ほど清書し直して、それから大事に押し入れの紙袋にしまつて置いた。今年の正月ごろ友人檀一雄がそれを読み、これは、君、傑作だ、どこかの雑誌社へ持ち込め、僕は川端康成氏のところへたのみに行つてみる。川端氏になら、きつとこの作品が判るにちがひない、と言つた。

ここでは三点を中心に見ておきたい。まずは、固有名詞の多いところである。なるべく多くの名前を載せることにより、『道化の華』の質が認められていることを強調することができる。その中には、井伏鱒二という既成作家である文壇人の名前が取り上げられ、また、最後に川端康成の名前も出てくることで、『道化の華』の出来栄がいいという強調につながる。次に考えるのは、『道化の華』の書き直しに関する言葉遣いである。「海」という作品の實在については別の議論となるが、書き直しというのは作品の質が更に磨かれたという主張につながる。数人に読まれた後、書き直し、再び評価され、「評判がよい」と認められたにもかかわらず、「さらに手を入れ、消し去り書き加へ、五回ほど清書し直し」たことは、『道化の華』の質が向上したというアピールが読み取れる。最後に見ておきたいのは、『道化の華』を読んだ人たちの評価である。既に「評判がよい」となり、最終的には「傑作だ」と高く評価されることになる。書き直しの結果を明確にした書き方で、『道化の華』の未読者にアピールすることになる。すなわち、『文藝通信』の「川端康成へ」という公開手紙を読む人は、『道化の華』の未読者であれば、数回書き直され、磨き上げられた「傑作」のことは知ったならば、読みたくなるだろう。この3点はまさに自己宣伝として解釈することができる。

川端への批判も同じような機能をしている。従来を読まれ方は、特に川端への批判が重視されてきたが、その中身を公開手紙という形式に置き換え、多くの人に読まれる前提で書かれたものとして読み直してみたい。「おたがひに下手な嘘はつかないことにしよう」というところから始まり、次の箇所が多くの読者の目を引く。

(前略) その生活が二ヶ月ほどつづいて、八月の末文藝春秋を本屋の店頭で読んだところが、あなたの文章があつた。「作者目下の生活に厭な雲ありて、云々。」事実、私は憤怒に燃えた。幾夜も寝苦しい思ひをした。

小鳥を飼ひ、舞踏を見るのがそんなに立派な生活なのか。刺す。さう思つた。大悪党だと思つた。そのうちに、ふとあなた对我的なネルリのやうな、ひねこびた熱い強烈な愛情をずつと奥底に感じた。ちがふ。ちがふと首をふつたが、その、冷く装うてはゐるが、ドストエフスキふうのはげしく錯乱したあなたの愛情が私のからだをかつかつとほてらせた。さうして、それはあなたにはなんにも気づかぬことだ。

新人作家である太宰治が既成作家である川端康成に公の場でこのようなことを語ることは、まだ「太宰治」という作家を知らない人への存在を知らせることが目的であろう。既成作家の評言に「憤怒に燃え」、「刺す」と思うような作家と、その「傑作」の存在を知らせる宣伝として機能しているのである。また、公開手紙の最後の段落も同じように機能しており、特に最後の一行は「あなたは、作家といふものは「間抜け」の中で生きてゐるものだといふことを、もつとはつきり意識してかからなければいけない」とあるように、印象に残るような書き方をしている。こうした書き方は、文壇にまださほど意識されていない新人作家であったとしても、少なくとも『文藝通信』の読者の目は引くだろう。これが公開手紙の裏にある自己宣伝の機能となる。

もう一つの意識すべき点として、『文藝通信』という媒体の性格から見ても、このような公開手紙が雑誌そのものに合うこととである。この公開手紙が編集部のフィルターを通らずに雑誌に

載ったとは考え難い。特に他の号の内容も検討してみると、多くの記事は依頼だったことが確認でき、「川端康成へ」を載せることが雑誌の作戦だった可能性はある。すなわち芥川賞に落選した作家が、文壇の作家たちの意識を引くために、このような内容を掲載することになったのである。しかし問題になるのは、その反応である。次節で太宰治の公開手紙「川端康成へ」の掲載後を確認しながら、太宰治の作家像の形成を考察していきたい。

4、公開手紙の掲載直後の反応

これまで「川端康成へ」を公開手紙として捉え直し、多くの人に読まれる前提で書かれたという枠で考え直してみた。そして「川端康成へ」の内容が自己宣伝として機能しているのではないかと論考した。問題として残るのは、果たしてその機能は効果的だったのか、ということである。ここでは『文藝通信』の一九三五年十一月号以降で太宰治がいかに語られたのかを取り上げ、その作家像を考察してゆく。

最もよく知られている反応は、川端康成自身の返事である「太宰治氏へ 芥川賞に就て」¹⁶⁾と山岸外史の公開手紙「憤怒する太宰治へ」という二つである。まず、川端の返事を考えてみると、その内容の多くは芥川賞選考委員会の動きを説明している。例えば、瀧井孝作や佐藤春夫などのパワーバランスや、入選作の選び方が説明され、「太宰氏は委員会の模様など知らぬと云ふかもしれない。知らないならば、尚更根も葉もない妄想や邪推はせぬがよい」とやや強い書き方をしている。更に読んでみると、『道化の華』を見直すという会話があつたにもかかわらず、「しかし、予選の全権を一旦瀧井氏に委託した以上、瀧井氏に従ふべきで、差出口

は控へたと云つた」と説明される。この文壇での力関係の問題は検討する必要があると思われるが、ここでは太宰がどのように提示されていたのかということを確認したい。川端は太宰の「妄想」や「邪推」に怒りを覚えていたように書いているが、同時に高く評価しているところも多い。特に、最後の段落には、次のような言葉が見える。

ただ私としては、作者自身も「道化の華」の方を「逆行」に優るとしてゐるならば、太宰氏にすまないとも思ふ。しかし、「逆行」の方がよいとした私が、太宰氏の理解者でなかつたとしても、今急に考へ改められない。「生活に厭な雲云々」も不遜の暴言であるならば、私は潔く取消し、「道化の華」は後日太宰氏の作品集の出た時にでも、読み直してみたい。その時は、私の見方も変わるかもしれないが、太宰氏の自作に對する考へ方も、また、或ひは變つてゐるかもしれないと思はれる。

再び『文藝通信』という媒体の性格を考慮すると、川端の返事は先輩として後輩へのアドバイス、太宰の今後の活動に期待を持っているとも読み取れる。傍線部に『道化の華』を「太宰氏の作品集」で読み直したいとあり、それを契機に作品を考え直す可能性を述べている。芥川賞の結果に関する評言にもあつたように、川端は太宰の才能を認めていることが改めて読み取れる。また、この返事の内容から太宰の公開手紙には川端からの返事を促すほどの効果があつたことを確認できる。¹⁷⁾

次に見るのは、山岸外史の公開手紙の内容だが、山岸の公開手紙は川端の返事の倍以上の長さがあり、ここで丁寧に分析するこ

とは困難であるが、山岸も太宰の才能や可能性を認めていることが非常に重要な点である。

ところで、この冊紙で『芥川賞後日異聞』を読んだ。通信の記者はうまいことを言ふ。君のあの川端康成への『泣き言』は、立派に、後日異聞であつたやうだ。僕も、一批評家として、それに立派に同感する。この時代でほん気になつて怒つたり笑つたりすることは全く異聞に属することなのだからね。

もとより、あの文章を読んで、君の腹底を、また君の曠悲を読んで、その感情が上手に文章らしく糊塗されてゐなかつたことを恰度ドストエフスキの妻君に宛てた生々しい手紙を読むやうで快かつた。常談がない。これは流石に頼母しかつたよ。あれは、君の書簡集に入る。如何にもジャーナルでもないのだから、そして、君が最も正鵠を得て川端康成氏の核心を突いたといふことにも、無論、僕は双手を挙げて賛成する次第である。

この一部から読み取れることは、山岸は太宰の言動に賛成していること、やるべきことだったという評言である。また、この山岸の公開手紙の中では「川端康成へ」が直接言及されているので、川端と同じように、太宰の公開手紙への反応として読み取れる。他にも、山岸は太宰の作品『道化の華』について多く語り、川端の発言にある「作者目下の生活に厭な雲ありて」というのは作品と併せて読んでいのではないかということ述べている。このような発言は川端の『道化の華』に関する解釈として考え直すことができる内容になっていのではないだろうか。¹⁸

十一月号に読者からの文章があり、その中で太宰に対するイ

メージがどのように提示されているのかを確認しよう。「読者談話室」に正木映三の次の言説がある。

芥川賞後日異聞は、ゴシップ的に起つた（正面からの抗議でなく）風聞に対して自己の立場を語つた作家としての良心的産物であつて幾分、文壇の雰囲気が見られる。

更に、同じ欄に伴野一也の次のような言説がある。

近時にがにがしい記事一つ。——太宰治君の「川端康成へ」はどこかで武田麟太郎氏も言及してをられたが、確かにあれは潔くなかつた。落選したヤケを八ツ当りしてゐるとしかとれぬ。気持わからない事はないが、もしその憤懣が真実なら練言のべる暇で川端康成氏を睦若させるやうなものを書いたらい、ぢやないか。文人の襟度はよきをよしとするに吝かではない筈だ。また文藝通信もあれを載せるのに、太宰君の将来のため再考して欲しかつた。惜しむ。

この中には、やや異なつた意見がうかがえるが、太宰治の公開手紙に関する反応がすぐ翌月に出てくることに注目したい。また、正木評では、太宰の名前が直接出てこないが、「作家としての良心的産物」とあるように、太宰を示唆していることが分かる。伴野評では、先ほど確認した山岸の公開手紙にもあるような共感がうかがえる。しかも、公開手紙における『文藝通信』のいわゆる意図が問われ、その影響と新人作家である太宰の将来を心配する読者の視点としての価値もある。また、十二月号の「読者談話室」で弘前からの読者である石橋修平が「先月川端康成へ「刺す」な

んで云つた太宰治はこつちの田舎から出た人だ」と公開手紙の一部を取り上げるが、「高見順みたいにおとなしくしてゐると今にラクに芥川賞なんか天降る人だ」というように太宰に期待を述べている。

いずれの言説も、太宰の公開手紙への反応として早かったことから、かなりのインパクトがあったことがうかがえる。ただ、公開手紙に対する反応は早かったものの、太宰の作家像は特に語られていない。もちろん、十二月号の「読者談話室」での「刺す」という現在なお注目される一部を石橋は取り上げるが、とはいえず太宰像がまだこの時点で誌面では見当たらないのである。しかし、重要なのは、太宰治の公開手紙「川端康成へ」はすぐに注目を浴び、自己宣伝の効果がみ出せるということである。

5、その後の反応と太宰像の形成

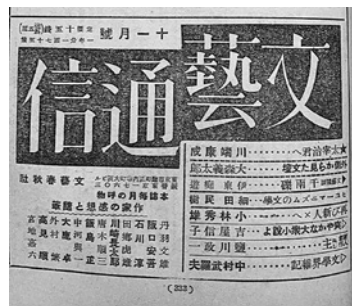
これまで見てきたように、太宰治の公開手紙はすぐに多くの反応を起こし、注目を浴びるのに効果的であったが、作家像が雑誌の紙面において作られなかったのである。本節では公開手紙掲載後の、一九三六年を中心に太宰治の作家像がどのように形成されたのかを論考していく。

紙面における言説を取り上げる前に、ここで文藝春秋社の太宰に関する意識を少し考え直してみたい。第一回芥川賞は文藝春秋社にとって非常に大きなものであったので、「川端康成へ」という公開手紙が起こす注目は会社それぞれが期待していたのではないだろうか。例えば、『文藝春秋』の一九三五年十月号に太宰の作品『ダス・ゲマイネ』が載せられ、末尾部のすぐ下に『文藝通信』の十月号、すなわち「川端康成へ」が掲載された号に関する

広告がある。レイアウトに注目すると『文藝通信』十月号は「特輯号」²⁰とされ、「芥川賞後日異聞」は太字になっている。また、『文藝春秋』の一九三五年十一月号にまた『文藝通信』に関する広告があり、この場合は川端康成の返信である「太宰治氏へ 芥川賞に就て」が載せられており、強調として注目すべき記事に「★」の印がある。この広告の効果については更なる研究が必要であるが、文藝春秋社の第一回芥川賞と太宰治・川端康成に関する意識が強かったことがうかがえる。



『文藝春秋』1935年10月号



『文藝春秋』1935年11月号

更に、『文藝通信』の一九三六年一月新年号に太宰治のエッセイ集『もの思ふ葦』²¹の一部が掲載されていることは無視できない。重要な点として、掲載場所が「作家の感想」であることである。これ以前の号の例に倣うと、ここに随筆を載せることは「新人」「新進作家」として認められたという意味になる。すると、『文藝通信』一月号では太宰が既に「無名新人」ではなくなったことが意識されていたのではないだろうか。もちろん、エッセイ集『もの思ふ葦』は同人雑誌『日本浪漫派』などに断片的に発表されてい

飯をくふなんか余程の大家にならなければ至難の事で今度の芥川賞でどうやら浮び上つた鶴田知也と小田嶽夫にしたつて十年も女房の内職で雌伏して来たんだから太宰もあの若さで認められただけでも御の字と云はなくちやならないが、とに角借金や原稿買込みの方法として二言目には「死生の境だから」とやられたんでは当人も苦しいだらうが、聞かされる方でも少し気のいい奴なら神経衰弱になつてしまふ。

この評論の中で太宰は「必ず愚痴をこぼす癖は少々度外れである」というように語られ、ちょうど同じ十一月号に太宰のエッセイ「先生三人」が「新人の感想」欄に掲載されていることは興味深い。なぜかというところ、このエッセイには太宰が自作『創生記』²³に対する中條百合子「文芸時評【五】 十月の諸雑誌から——封建風な徒弟氣質」²⁴での評価について反論をしていたからである。この二つが同時に出されることは、太宰の作家像に深く関わり、特にB・B・B評では芥川賞関係作家が多く取り上げられ、その中に太宰が入っていることが大きな意味を持つのである。

次に見るのは、十二月号の特集「今年の諸問題を決算する」に入っている板垣直子「今日のデカダニズム文学」というエッセイである。一年間を振り返りながら、気になる作家が何人か取り上げられる。他作家の作品に絶望や自殺が書かれてあることを踏まえつつ、太宰が次のように描写される。

また、極めて現代の青年作家らしい一種の歪みを持つてゐる大宰治氏は、「つねに絶望のとなりにある」といふ述懐をくりかへしてゐる（中略）。

大宰治氏を今風な青年だと先にいつた。リリツクがあつて、

絶望と反抗がそれに加はり、一つの雰囲気を作つてゐる。しかし文学の形式としてみれば、自己を肯定し主観を混じすぎるために、すなほな作風が生れない。従つて描写が生きてこない。氏の流儀だと作品は息切れがし、腰が折れる。この作家に対してはかなり冷笑の筆をとる既成批評家もあるやうだが青年層が想像以上に注意を払つてゐるのは、彼も亦時代の犠牲者だからだらう。

ここで太宰の作家像が強くなり、「絶望」や「自殺」と結び付けられ、「自己を肯定し主観を混じすぎる」性格というのが直接与えられている。また、ここで重要なのは太宰治が「つねに絶望のとなりにある」という一部である。板垣評では直接言及してないものの、これは『道化の華』の一部である。つまり、『道化の華』の一部を取り上げることは第一芥川賞やその後に発表された公開手紙との関連を浮かび上がらせ、当時の太宰像が作品と併せて描写されているのである。

最後に取り上げるのは、一九三七年一月号の中島健蔵のエッセイ「新人論——一九三七年への言葉——」である。このエッセイでは、多くの作家名が取り上げられ、「第一種の新人」と「第二種の新人」という概念も論じられるが、ここでは太宰に関する言説を中心にしておきたい。「第一種の新人」の提案の後に太宰が次のように取り上げられる。

太宰治君がやはり、此の種に属するらしいとも思はれるが、彼を思ひだすと、直ちに、第二種の新人へ移つてゆかなければならない。

第二種の新人とは、同じく突然の出現があるが、風の如く

に來り、風の如くに消えてゆく人々で、(中略)第一種とは違ふところは、その成熟が、どの程度まで安定なものか甚だ疑はしいと共に、一時的にせよ、驚くべき実行力を示す点にある。いはば実行力の方が、成熟に先立つて駆足をして、そのために減びてしまふ型である。私はこれを消耗的天才型と呼ぶ。そして、これも、出現の予測が全く不可能なのである。(中略) 太宰治君なども、消耗性を思はせる点があるので、第一種の部類に入れ兼ねたのだが、私は彼の再起を信ずるが故に第二種の部族にも入れ兼ねてゐる。多少なりとも消耗的な新人は、転生に近い変換がなくては、滅亡を免れ難い。

この評言の中で、芥川賞や作品などは直接言及されていないが、作家像の描写が非常に強化されている。突然出現した作家がまた突然消えてしまうという意識から、結果的に「消耗的天才型」と見られている。しかし同時に「彼の再起を信ずる」という期待から「第一種の部類」にも「第二種の部族」にも入れることができないと中島が断言している。こうした太宰治の作家像は現在もしばしば当てはめられているが、ここで確認できるように、当時、既に太宰治の作家像が形成されていたことが分かる。

ここまで多くの評言の中で太宰治がどのように語られてきたかを見てきた。いずれの言説も第一回芥川賞に関連する太宰の公開手紙と川端の返事が発表されて以後の言説で、次第に固定された太宰像が見えてくる。中島評以外は芥川賞関係の内容になっており、一年後の評論家たちの太宰に関する見方がうかがえる。本稿で見たのは、主に『文藝通信』に出てくるものであり、一つの媒体に絞って検討することにより、従来の研究とは違ったアプローチで、第一回芥川賞と太宰治像の形成を確認することができた。

その作家像の形成の多くは太宰自身が書いた「川端康成へ」の内容と連携していることから、公開手紙の自己宣伝の機能が効果が取れる。

6、おわりに——結論と今後の課題

本稿では、『文藝通信』という雑誌媒体を中心に、太宰治の作家像の形成を検討した。いわゆる「芥川賞事件」の前後で、太宰が『文藝通信』にどのように取り上げられたのか、また「川端康成へ」を出してから、その作家像がどのように固定していったのかを論じた。従来の研究や評論の中でも、太宰がいかに語られたのかという課題が取り上げられてきたが、一つの雑誌を詳細に見直すことよって、改めて新人の頃の太宰に関する言説を検討し、第一回芥川賞と太宰治がどのように意識されていたのかを見出すことができた。また、太宰自身の言葉以外にどのような言説が太宰像と関わったのか、その作家像がいかに形成されてきたのかを論考した。

今回の考察の中心は、太宰の「川端康成へ」の中で自己宣伝という機能がどのように働いていたのかということである。従来の分類を確認した上で、改めて「川端康成へ」を公開手紙として扱い、川端以外の多くの人も読むという前提で書かれたものとする。ことで、第一回芥川賞の結果に関する「抗議文」や「反論文」だけでなく、自分の作家像や作品に関する自己アピール、すなわち「川端康成へ」の中の自己宣伝がどのように機能しているのかという点を論考した。一年後の言説や評言でも芥川賞と太宰治はもはや切り離すことができないものとなり、「絶望と反抗」では「一つの雰囲気を作つてゐる」というイメージが形成され、固

定されていることも確認でき、「川端康成へ」という公開手紙の自己宣伝の効果が確認できる。

本稿で取り上げなかった課題としては、この後、太宰がいかに語られたのかということ进行分析する必要がある。特に、第一回芥川賞やそれに関連する多くの事柄が後に、作家像の固定とどのように関わるのかということを検討していきたい。また、太宰以外の作家の場合、どのように作家像を残したのか、あるいはどのようにな作家像が作られたのかということを視野に入れつつ、比較対象を検討したい。例えば、以前の時代に谷崎潤一郎と芥川龍之介の『改造』における「小説の筋」論争という「応酬」があったように、太宰と川端の場合は結果的に「応酬」になっていないという点が重要になってくるであろう。また、今回の考察を通して、芥川賞それ自体に関する研究、特に太宰たち第一回の候補作家が芥川賞を実際にどのようなものとして捉えていたのか分析する必要があると思われる。第一回芥川賞が催されると発表されてすぐ、当初の言説から芥川賞に対する期待や希望、将来性等がいかに語られたのかを検討したい。

注

- (1) 更に詳しくは例えば川口則弘『芥川賞物語』（パジリコ、二〇一三）や小谷野敦『芥川賞の偏差値』（二見書房、二〇一七）等を参照。
- (2) 文芸復興に関する詳細な論考は平浩一『文芸復興』の系譜学——志賀直哉から太宰治へ』（笠間書院、二〇一五）を参照。
- (3) <https://catalogue.books-yagi.co.jp/books/view/1404>（最新

閲覧二〇二二年十一月二十日）、なお、この紹介文は日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学館・小田切進編』『日本近代文学大事典』（第五卷、講談社、一九七七）の「文藝通信」項（三八五頁）とほぼ同じである。

- (4) 初出は檀一雄『小説 太宰治』（六興出版社、一九四九）だが、引用は小学館、二〇一九に拠る。

- (5) 相馬正一『芥川賞事件』（同著『評伝 太宰治』第二部、筑摩書房、一九八二）

- (6) 井原あや『太宰治「川端康成へ」小論——一九三五年前後の（川端康成）を手がかりに』（『太宰治スタディーズ』二〇一〇・六）

- (7) 鶴飼哲夫『解説——太宰治と五十年戦争下の芥川賞』（同編『芥川賞候補傑作選』春陽堂書店、二〇二〇）

- (8) 鶴飼哲夫『芥川賞の謎を解く——全選評完全読破』（文芸新書、二〇一五）

- (9) 小谷野敦前掲

- (10) 植田康夫『芥川賞裏話』（日本ジャーナリスト専門学院編『芥川賞の研究——芥川賞のウラオモテ』みき書房、一九七九）

- (11) 松本和也（「新しい作家」の成型——第一回芥川賞と反乱する作家情報）（同著『昭和十年前後の太宰治——（青年）メディア・テクスト』ひつじ書房、二〇〇九）

- (12) 安藤宏『太宰治 弱さを演じるということ』（ちくま新書、筑摩書房、二〇〇二）

- (13) 橋爪健『芥川賞——文壇残酷物語』（日本ジャーナリスト

- 専門学院編『芥川賞の研究——芥川賞のウラオモテ』みき書房、一九七九)
- (14) 川口則弘前掲
- (15) ここで「読者」とは一般読者だけではなく、文壇人も、新人作家たちも含めて「読者」である。
- (16) 十一月号の目次ではこの返事は「太宰治氏へ（芥川賞）」という形になっているが、本稿では紙面の形を使用する。
- (17) 本稿とは異なったアプローチで、安藤宏「川端康成と太宰治」（田村充正・馬場重行・原善編『川端文学の世界——その背景』4、勉誠出版、一九九九）を参照。
- (18) 前掲の松本和也論では、この箇所が山岸自身の『道化の華』の解釈であるというような指摘があるが、ここでは山岸の解釈だけではなく、川端の意識と解釈して読むこともできるのではないかと指摘しておきたい。
- (19) 特に一九三五年十一月号の『文藝春秋』に菊池寛「話の屑籠」に出てくる「芥川賞、直木賞などは、半分は雑誌の宣伝にやつてゐる」ので、売上がよくなったという言説、またそれに対して一九三六年一月号の『文藝通信』に石川達三「菊池寛」ではその意識に「私が呆れた」と述べている。
- (20) 実際に刊行された十月号は雑誌それ自体に「特輯号」という表記がない。
- (21) 載せられたのは「健康」「K君」「ボオズ」「絵はがき」「いっはりなき申告」「乱麻を焼き切る」「最後のスタンドプレイ」という七つである。
- (22) 初出『新潮』一九三六・一〇
- (23) 『東京日日新聞』一九三六・九・二七